

独立法人農業研究機構と日本農学アカデミー

三輪睿太郎

農業・生物系特定産業技術研究機構理事長

日本学術会議の改組に関し、農学系が無くなり、農学系の会員数も減少することに昨年の総会でも議論があった。

一言でいえば日本学術会議の意志決定に数の面で影響力が発揮できなくなるのではないかということが心配の種であろうか。

学術会議改革と会員の再構成について、独法機関の研究者は関心が薄かったと思っている。理由はその活動が独法機関の事業、予算、組織などの重要事項にほとんど関係なかったことが第一、要するに、アカデミズムにおける農学の地位が低下なのだから、大学の先生の問題だろう、という意識が第二であったと思う。

数の力が弱まったのであれば、数を取り戻す努力が必要であろう。小生は新制度による会員の推薦を依頼された一人であるが、例えば、旧6部の先生方から、候補者を多く挙げる、絞り込むなどのいわゆる「戦略」が発せられたことはなかったと記憶する。努力をしないで「会員が減った、困った。皆さんも困るでしょう」という発言を聞くことは小生の職場などでは余らないことであり、新鮮な感じがした。しかし、そんなことを議論する暇があったら、会員改選時に戦略を立て、有力な候補を集中的に推薦する運動を農学アカデミーがやることを企めばよい。

数の力を実力でカバーする方法もある。新学術会議で農学系の会員が他の分野の

会員を凌ぐ学識・見識を発揮し、学術会議におけるイニシアティブをとればよい。

そのためには、農学の進歩を鮮明な学術論、科学方法論、教育論、産業技術論、社会技術論に仕立て上げ、世界の学術に新たな方向付けを持ち込むような知的作業が必要である。このような知的作業というと、とかく、事務的な組織的作業で文章を作ることだという人が多いが、一番大事なのは、関係者が鮮明な見解を主張し、対立軸と論敵を仮設して論点と論理を深める議論を行い、参加者が議論する過程で、それぞれの主張と論理の水準を高めることだと思っている。それ自体が最大の成果であり、参加者が論議を尽くしたと思う時に仮設した対立軸と論敵関係を解消すればよい。議論の結果をまとめるようなことは、二の次にしたほうが優れた議論になることに留意すべきである。

農学アカデミーは、学術会議の会員にこのような議論の場を提供し、アカデミー会員に異なる立場で農学の指導的立場に立つものとして見識をみかく場を与えることを役割としたらよいと認識している。

このように、農学アカデミーはバランスのとれた代表的な見解を形成するというよりも議論を呼ぶ重要な問題について鮮明な主張・見解・運動を行い、社会とともに、みずから進化・成長する会であるべきだと思う。